

シブすぎ技術に男泣き！

見ル野英司 著

著者の見ル野氏は、自称「理工系漫画家」を名乗り、半導体製造装置やアミューズメントゲーム機などの設計開発の会社に9年間勤務した後に、漫画家としてデビューした人である。『ビックコミックスピリッツ』や『ヤングジャンプ』への連載をはじめ、世界初のフローチャート式漫画『東京フローチャート』（小学館）を執筆し、理工系エンジニアを中心に多くの読者から支持を得ている。設計開発会社に勤務していた時の体験談を基に、「ものづくり」の楽しさや苦勞、ものづくりに賭ける男のロマンなど、技術者の仕事と日本の技術の素晴らしさをコミック風に紹介している。

電気製品、ゲーム機、医療機器など様々なジャンルが取り上げられ、ものづくりに打ち込む人間模様が「男泣き」するほど表現されている。

第1章「ものづくりに賭ける一本気な情熱に男泣き」では、たとえ赤字となっても、利益がゼロであっても、エンジニアは、いいものを作りたいという話。第2章「日本の発明王の裏にある苦節に男泣き」では、世界初の電子式テレビを発明した高柳健次郎や世界で初めて乾電池を作った屋井先蔵、日本初の製麺機械を考案した真崎照郷の技術者人生の話。特に、機械式テレビと電子式テレビの構成図や乾電池、製麺機械のイラストは、正確に描かれていて見ても楽しい。第3章「日の目を見ずして消えていく機械に男泣き」の、時間と手間をかけ、苦勞して作った製品が日の目を見ないことに、「良いものでも、時代に乘れなければ埋もれてしまう」という話には、エンジニアの悔しさが伝わってくる。第4章「うたかたの夢と散る開発の日々に男泣き」では、プリクラをアレンジした、

「Tシャツプリクラランド」の製作に関わった多くの人たちのドラマが描かれている。結果的にTシャツプリクラランドを街で見かけることはなかった。第5章「愚直なまでにこだわりぬく職人技に男泣き」の、たかが穴あけ、されど穴あけの話やパール2本で全てを動かす職人技には現場第一主義の精神がひしひし伝わってくる。

好評につき続編の「シブすぎ技術に男泣き2!」も発行された。技に注目し、職人でなければ出せない熟練の技術とわずかな違いをも見逃さない磨き抜かれたプロの目を題材として、「東京・蒲田と東大阪の町工場のものづくり対決」の話を中心に、話題が満載となっている。

東京・蒲田では、工作機械や工具に触れているが、自転車ネットワークの話が面白い。東大阪では、「球」を作る工場、金網製造の工場、磁石の工場など地味ながらも歴史も長いオンリーワンの工場が紹介されている。また、ハード面ばかりではなく、ソフトや保守・メンテナンスの話も出てくる。更に、ものを分解することによって、その製品の仕組や機能を分かりやすく解説している。製作された装置の工夫された機能や試作機の話と工具のイラスト入り説明は、機械に疎い人にも分かりやすく描かれている。

この本では、実際のものづくりの現場に携わっていなければ分からない、細かいことまで解説されており、ものづくりに興味ある人にはたまらない一冊となっている。特に、工夫した点はもとより苦勞した点などは、大いに参考になった。現在は、ものが豊富で、大変便利な時代であるが、新しい製品を生み出すもとは、そのことに身を削ったエンジニアがいたことを忘れず、ものを大切に作る心を持ち続けて欲しい。

工業高校生に限らず、「ものづくり」に興味・関心のある中高生をはじめ、多くの人たちに一読していただきたい本である。

（中経出版、A 5 版、159頁、925円）（長田利彦）